

# 三重県の土砂災害の歴史

株式会社 防災地理調査 今村隆正・森本優也・今村智美

## 1. はじめに

筆者らは、日本全国の歴史時代における土砂災害の調査研究を続けている。本発表は、令和8年度砂防学会研究発表会の会場である三重県の事例について、これまでの調査成果を発表するものである。

三重県は、紀伊半島の東部に位置し、南北約180km、東西約10~80km、面積5,777km<sup>2</sup>である。地形は北部と南部で区分される。北部では伊勢湾に沿って伊勢平野が広がり、その西側に丘陵地や台地が分布し、さらに西には鈴鹿山脈や布引山地などが南北に連なる。布引山地の西側には上野盆地が存在する。

地質は、県中央部を東西に走る中央構造線によって二分され、北側の内帯と南側の外帯に大きく分けられる。内帯は主に美濃帯と領家帯から構成される。領家帯は、土砂災害の発生しやすいマサ土（風化した花崗岩）が広く分布する。伊勢湾に面した地域は、第四紀の沖積層や洪積層などが広がる。外帯は、御荷鉾構造線・仏像構造線によって北から順に三波川帯、秩父帯、四万十帯に区分される。三波川帯の東部には、地すべりの発生しやすい御荷鉾緑色岩類が分布する。

気候は、上野盆地を除くほとんどの地域が太平洋側気候に分類されるが、地勢の複雑さから地域差が大きい。

## 2. 地震の記録と土砂災害

三重県に被害を及ぼした歴史地震は、南海トラフ地震（南海地震）と内陸直下型地震である。

南海トラフの巨大地震では、家屋倒壊、津波などによる被害を受け、特に宝永四年（1707）の宝永地震で1,000人以上の被害が発生した。内陸直下型地震では、嘉永七年（1854）に木津川断層帯を震源として発生した伊賀上野地震で、伊賀上野付近で死者約600人、全壊家屋約2,000棟の被害が発生した。また、昭和19年（1944）の東南海地震では、死者・行方不明406人、昭和21年（1946）の南海地震では、11人の被害が発生した。

このように、歴史上何度も地震災害に見舞われているが、伊賀上野地震により発生した陥没地形や岩倉峡の崩壊の他には、中小の崩れはあっても大規模な土砂災害を記録した資料は見当たらない。

## 3. 降雨を誘因とした土砂災害

三重県は南北に長い県であることから、各地の気候も異なる。南部山岳地帯などは年間降水量が4,000mmに達する多雨地域であり、台風などの豪雨を誘因として土砂災害が多く発生している。

### (1) 安永二年（1773）「白猪山の大崩れ」

大雨により白猪山の各所で大規模な山崩れが発生し山津波となり、下流は大水となる。山麓の夏明や神路山・長野の深野一帯は土砂に埋没し、家屋・田畑等が多数流失した。

### (2) 明治32年（1899）「木津の山津波」

集落背後で大規模な山崩れが発生し山津波となり木津集落を襲い、家屋流失5戸、死者28人。慰霊碑もなく、古老の伝承も途絶えてしまっているが、当時の村長が描いたスケッチが残っている。

### (3) 昭和28年（1953）「28災害（東近畿大水害）」

集中豪雨により、島ヶ原村や上野市（現：伊賀市）の背後山岳では多数の斜面崩壊が発生し、それが山津波となって流下したことで30人以上が犠牲になった。各地に慰霊碑が建立され今も語り継がれている。隣接する京都府では「南山城水害」と呼ばれ、島ヶ原では「28災害（東近畿大水害）」と呼ばれている。

### (4) 平成16年（2004）「平成16年台風第21号 豪雨災害」

台風16号と秋雨前線の複合豪雨により、宮川村（現：大台町）では、大規模な山崩れと土石流が多数発生し、死者6人、行方不明1人。

### (5) 平成23年（2011）「紀伊半島大水害」

台風12号による豪雨を誘因とした災害である。紀伊半島の山岳各地で大規模崩壊とそれに伴う河川の堰止め（天然ダム）・決壊などによる土砂災害が多数発生し、三重県では、主に南部の熊野地域において土石流などによる災害が発生した。

表1 三重県の主な土砂災害年表

発生年月日	誘因	発生日点	土砂災害概要	位置
1773. 8. 8 安永二年 六月二十日	降雨	松阪市 飯南	白猪山大崩れ。山麓の夏明 など埋没。	①
1802. 9 享和二年八月	降雨	四日市市 八王子町	天白川上流部で山崩れ多数 発生。八王子・室山・日野 などへ砂入。	②
1854. 7. 9 嘉永七年 六月十五日	伊賀上野 地震	伊賀市 島ヶ原	地震断層南側で土地陥没で 新湖形成。また、岩倉峽の 岩石崩落。	③
1896. 9. 11 明治29年	降雨	亀山市 関町	山津波，坂下古町は本村へ 移転し片山神社のみ残る。	④
1899. 7. 8 明治32年	降雨	紀北町 海山	大規模な山崩れ，家屋5戸流 失，死者28人。	⑤
1914. 10. 1 大正3年	降雨	尾鷲市 栃川原	山崩れ，11戸流失，死者10 人。慰霊碑「栃川原水難者 之墓」建立。	⑥
1953. 8. 15 昭和28年	降雨	伊賀市 島ヶ原	「東近畿大水害」山津波， 上野市と島ヶ原村で死者。	⑦
2004. 9. 29 平成16年	降雨 台風21号	大台町 宮川	大規模な山崩れと土石流多 数発生。	⑧
2011. 9. 4 平成23年	降雨 台風12号	紀宝町	「紀伊半島大水害」熊野地 域において土石流発生。	⑨

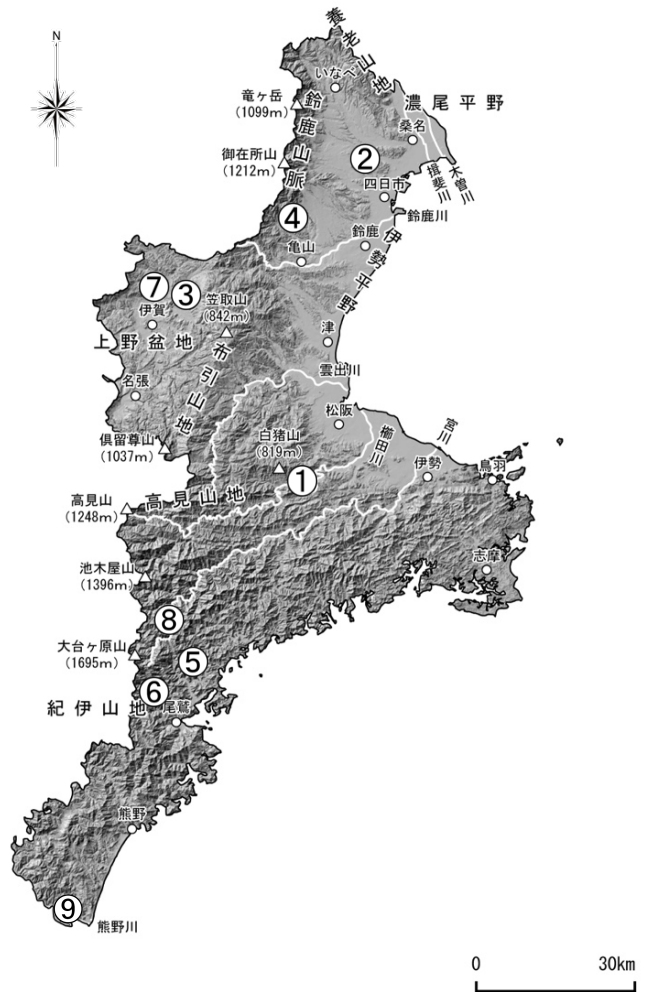


図1 三重県の主な土砂災害発生位置図  
(地理院地図に加筆)

#### 4. 三重県の土砂災害の歴史と特徴

三重県では、台風や前線による豪雨を誘因として土砂災害が繰り返し発生している。地震災害においては、伊賀上野地震では 600 人ももの死者が発生し、土地が陥没し伊賀盆地が湖状になるといった地変も発生した大規模な地震災害の事例もある。

しかし、江戸時代や明治時代などの古い時代の歴史資料には、個々の発生場所が特定できるような記録はあまり存在しない。その理由は、山崩れそのものよりも流下する山津波による被害がほとんどであったからであろう。繰り返し発生する南海トラフ地震においても激しい揺れによる山崩れは発生していたのであろうが、津波による被害と比べ人々の生活に直接影響しなかったのかもしれない。

過去の南海トラフ地震による大規模な山崩れの記録は見当たらなかったが、山間地にも集落が分布する三重県においては地震による土砂災害に対しても高い意識を持つべきであろう。山間地での避難は困難な場所も多く、避難経路や避難のタイミング等について課題は多く残されている。

#### 5. 文献

- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子(2013)：日本被害地震総覧 599-2012，東京大学出版会，694p.
- 地震調査研究推進本部：三重県の地震活動の特徴。
- 新田康二 (2017)：三重県歴史災害史年表稿（紀伊半島東側周辺），233p.
- 三重県 (2017)：三重県史，通史編 近世 1，853p.
- 「四郷・ふるさと史話」編集委員会 (1999)：四郷・ふるさと史話，84p.
- 尾鷲市役所 (1971)：尾鷲市史 下巻，874p.
- 飯南町史編さん委員会 (1984)：飯南町史，1506p.